石獅子を通して沖縄文化・風習を知る，伝える

石獅子作家　若山大地さんへのインタビュー

若山大地さんは，沖縄県那覇市で，スタジオ de-jin（http://www.de-jin.com/）という工房兼ギャラリーショップを構える，石獅子（いしじし）作家である．愛知県で育ち，沖縄県立芸術大学および同大学院にて彫刻を専攻し，学生時代から長年に渡って石と向き合い続けてきた．沖縄での物作りやアプローチを模索する中で，村落獅子との出会いをきっかけに，石獅子制作に携わるようになる．琉球石灰岩を用いることと沖縄をテーマにした作品作りにこだわり，遠くにある芸術ではなく身近にある大衆民芸としての彫刻を大事にしている方である．また，県外での展示販売，母校での非常勤講師や幅広い年代の方へのワークショップなどを通して，石獅子や石彫の文化を伝える活動も行っている．

この企画は，ある作業に熱心に取り組まれている方へのインタビューを通して，作業が人々の健康にどのように作用するのか，またその作業が周囲の環境や社会にどのような影響するのか，ということを知ることを目的にしている．今回は，多くの芸能や伝統技術を発展させてきた沖縄の地で，石のシーサーを制作されている若山大地さんにお話しを伺った．

琉球石灰岩と石獅子

本　誌：若山さんが制作されている石獅子とはどのようなものですか？

若　山：石獅子のベースになっているのは，村落獅子という石のシーサーです．沖縄中の村々にあります．村落獅子とか村獅子とか村シーサーとか言うんですけど，いわゆる沖縄の魔除けとして使われているシーサーの原型じゃないかと言われてます．あと，琉球石灰岩でできてるというのもひとつの定義のようなものですね．石灰岩自体は岩石としては若いので均一ではないんですね．木と同じように，石にも”目”があるんですよ．昔も手で彫る手法だったんだろうということで，そうゆう風にやっています．

本　誌：石獅子を作り始めるときに，何から始めるといった決まりごとはありますか？

若　山：作るサイズに合わせて石屋さんに石を切り出してもらっていて，形はある程度決めているので，小さい作品にはデッサンはいれません．ちょっと大きくなってくるといれますけど．石の流れによって作れない形も出てきますが，「この石だったらこの形が作れるかな」という風に，ちょっとずつバリエーションが増えていってます．

本　誌：「この石にはこの形に」と出来るスキルをお持ちだということですね．

若　山：そうですね，大学で彫刻を専攻していて，そこで石を使っていたので，石の”目”を見れるようになったっていうのはあるかもしれないです．

本　誌：色々なサイズがありますが，制作にはどのくらい時間がかかるんですか？

若　山：一番小さいサイズを，これだけに集中して 1 個やれば場合によっては 40 分で作っちゃいますね．ただこれを 8 時間で何十個も作れるかっていえば，そうでもない．集中力も続かないし．前は 1 個ずつ完成させてたんですけど，今は作る工程を少し工芸的に，荒彫りをある程度済ませて，って変えてるんで，1 個何分という感じでは作ってないですね．

本　誌：作ってる最中はどんなことを考えていますか？
若　山：ラジオ聴きながらやってますね．案外何も考えてないんじゃないかな．
本　誌：無心にやってるときってありますか？
若　山：ありますけど，それが一日の中でどれくらいあるかといえば…．
本　誌：それは”慣れ”でしょうか？
若　山：慣れっていうのは絶対あるでしょうね．慣れの怖さは一応持っているつもりですが，正直もっと上手くなるだろうなという気はしています．

絵が好きで沖縄が好き

本　誌：若山さんは愛知県のご出身ですが、いつ頃から沖縄に住むことを意識されてたんですか？
若　山：完全に住むと決めたのは中学 2 年生ですね．母親が沖縄出身で，お盆とかでは来てたので，帰るときは小学生のときは泣き叫んで「絶対に帰りたくない！」って．従妹とかは東京から来て，子どもだけで丸っと夏休み居たりするわけですよ．僕はそんなことさせてもらえなかったから羨ましくて．行けない年があると，その 1 年がすごく長いし，もう住みたいと思って．
本　誌：沖縄に住むことを決めてから美術の道に進まれたんでしょうか．
若　山：いえ，それは独立してましたね．高校進学の志望校を，名前を知ってる沖縄の高校にしたけど却下されました．それで愛知県の高校に入ったんですけど，選択授業で書道と美術と音楽とがあって．もちろん美術が好きだったので美術を．
本　誌：絵をお好きだったんですか？
若　山：子どものころから絵を描くのも好きだし，モノづくりも好きだったし．歴史が好きだったから戦国武将の鎧をダンボールで作ったりもしてました．美術の授業は楽しいから，絵とか描いてたら，先生から美大の話が出て．
本　誌：どんな絵を描いたら，そんな風に先生から美大を勧められるんでしょうね？
若　山：うーん，真面目にやってたから目立ったんじゃないですか（笑）？そこで美大というものを初めて知りました．普通にはいけないから美術予備校に行きなさいと．そこの予備校では基礎科といって，すべての美術を体験しましょうというのがあって，そのときは絵を描くことしか頭になかったから，なんとなく油絵科を目指しました．大手予備校だったので，まず最初に進路希望を聞かれるんです．それで調べたら，沖縄に美大があって．しかも公立だから授業料も安いし．これ来た！と初めて合致しました．そこの先生が彫刻の人で，初めて授業で塑像というモデルの首像制作をやったら成績が良かったんですね．それで彫刻にしようとなって．

石獅子との出会い，沖縄でモノづくりをする意味

本　誌：お母さまが沖縄出身ということですが，シーサーにも子供の頃から馴染みはあったんですか？
若　山：いや，石のシーサーには馴染みはなかったですね．むしろ，石獅子は 2009 年以降なんで，まだ 7 ～ 8 年です．
本　誌：それまではどんなことをされていたんですか？
若　山：大学で勤めてもいたんですけど，そうですね，作品のコンセプトは沖縄で，沖縄の風土とかお城とかをデフォルメしたもの，いわゆる抽象作品みたいな感じでした．
本　誌：最初から石を扱ってはいらっしゃったけど，形が変わっていったということでしょうか．
若　山：大きな流れが美術の中でもあると思うんです．大きく言うと，絵画彫刻みたいないファインアートと，工芸デザインみたいに売ることを前提としたもの．彫刻とか絵画は，表現の方を第一に見るので，売るっていう感覚がどうしても乏しいです．今使ってる石はちっちゃいですけど，前は岩石でした．石は本来ものすごくでかくて，特に琉球石灰岩なんてその辺一帯掘れば全部です．だけど大きな作品は置ける場所も限定されるし，それを個人的に売るということにはなかなかならなかった．だから変わったのは，アプローチの仕方ですね．
本　誌：商品化できるものに，ということですね．ところで石獅子を作られてる方は多いんですか？
若　山：いや，そんなにいないと思います．石屋さんでモニュメントとして作るというパターンが殆どで，これを仕事にしているのは，僕以外にはもう一人しか知りません．
本　誌：では，新天地に来た！という感じでしたか？
若　山：意外と自然でしたね．もともとテーマが沖縄だったし．彫刻や絵画で食べていくのは，可能性でいえば限りなくゼロに近いので，内地や外国行くだのという流れになるんですね．だけど僕は，沖縄に住むことを前提として来てるので．悩みましたけど，沖縄に居て『沖縄』抜きだと，僕は物を

作れないなぁと自分でもわかってたので．そのときに大学時代の友人から勧められたのが最初ですね．彼から「沖縄で石やっていくんだったら石獅子はどうなの？」って言われて．「えー？」と思ったけど，村落獅子を見せてもらって衝撃を受けました．それまで既に 15 ～ 16 年は沖縄で石彫ってたのに知らなかった．石といえば彫刻より建築のほうに目が行ってたんで，沖縄でもそうゆう大衆的な彫刻があったんだという．それまでも，いわゆる美術というものは誰に見せるのか？という疑問もどこかで感じていたので，沖縄でやっていくなら，やっぱり沖縄のいわゆる普通の人に見てもらえないと意味がないと思ってました．だけど，美術というと敷居が高くて難しいと思われている傾向がある．だから，生活必需品ではないけど，その間を埋めるような彫刻のアプローチが，可能性としてはあるのかなと思いました．

本　誌：美術が敷居が高いというのはわかる気がします．好きなんですが．

若　山：ひとつには値段の高さですかね．日常で使うことが前提なモノづくりとは違って，どうしても絵画は一枚何十万とか何百万とかになる．結局それも何か違うんでしょうね．作ってる本人も違うっていうのを理解しながら，お金で美術を語ることがタブーな感じがある気もしますね．

本　誌：大学ではそんな話は出ないんですか？

若　山：出ます．出ますけど，学生のときは目の前の彫刻を学ぶことで精一杯ですから．大学では基本は人体彫刻を粘土でモデリングして作る一方で，カービングといって木や石をマイナスにしていく作業をやります．マイナスにする作業って慣れてないんですよ．子どもの頃から粘土を足すとかは結構皆やってきてるんですけど，塊から物を減らしていくのは，ある程度訓練しないと出来ないから，その意味では彫刻はベーシックな技術みたいなのを学ぶところがあるんで，ファインアートがどうこうと言いながら，学校で学ぶことは割と職人的なんですよね．

村落シーサーは庶民の守り神

本　誌：その村落獅子なんですが，曖昧な形のものが結構ありますね．長年風雨にさらされた結果なんでしょうか．

若　山：というのもあるんでしょうけど，めちゃくちゃ変化しているとも思わないですね．庶民が自分たちのために作ってる魔除けなので，首里城にある立派なシーサーのような細かい造形をする必要がないというか．そもそも素材が違う．琉球石灰岩だから使ってよかったという部分もあって．

本　誌：それはどうゆう意味ですか？

若　山：首里城とかにあるシーサーは，中国の石とか，久米島の安山岩とか，本島の砂岩とか，硬くて彫るのが大変なんだけど細工ができる石を使ってるんですね．かたや琉球石灰岩というのは，城壁とか建築に使うのがメインで，それは加工がしやすいというのがあると思うんですよ．沖縄は，昔は下手したら本土以上の階級社会だったので物の制限がすごくあるから，ある程度自由が許されたのが，多分この石なんですよ．というのは掘れば出てくるし，畑を開墾するにしろ道路を整理するにしろ，絶対突き当たってしまうのがこの石．これは想像になっちゃうけど，苦労させられてるはずなんですよね，この石には．逆に言えばそんな苦しめられる存在なのに，それを魔除けとして扱った庶民の逞しさですかね．最初の村落獅子は，簡単に言っちゃうと，そこの集落があまりにも災難続きで疲弊してて，どうしたらいいか久米の村の風水師に相談したら，火山（フィーザン：災いをもたらす山）に向けて，口開けた獅子の形をした石を対峙させたら治まるはずよ，と．そして置いてみたら治まったので，どうもそれから広まっていったっぽいです．ただ彫刻的な部分で見ると，素人は絶対作ってないというのもわかるんです．1.5t の獅子を作ろうと思ったら，3t の石が必要なんですが，3t の石を，道具も乏しい時代に，ただでさえ飢餓で喘いでいる人たちがさらに生活を犠牲にして作るとは到底思えなくて．素材こそ石灰岩ですけど，彫り込みも深いし，上等なんですね．だから，これは中国の職人の手が入ってるんだと思います．彫刻的にいうと，初代のものは立派ですけど，だんだん立派じゃなくなっていくんです．ですけど，僕はその立派じゃないほうが好きで．

本　誌：立派じゃない方は，かわいい顔してますね．

若　山：獅子と言われてもわからないんですよね．誰もライオンを見たことがないし．沖縄は魔除け思想が強いんで，どんどん置くようになって．だから数の定義がないんですよね。

図1）村落獅子（スタジオde-jin　HPより）

石獅子と旅をする

本　誌：何か石獅子作りに関する思い出深いエピソードみたいなのはありますか？

若　山：たくさんあると思いますが…．美術としてやってたときは，ギャラリーで発表するとか野外彫刻展の公募に出してみるというアプローチだったのが，石獅子メインの仕事の場合，どうアプローチしたらいいのかよく分かんなくなって．実は，あちこち旅したいなという旅の欲求はすごくあるんです．だけどなかなか行けない．今は本当に少ないんですけど，デパートの物産展みたいなところが時々呼んでくれるようになってきて，そうなるとこれを持って旅に行けるみたいなのが嬉しくて．まだ年に 1 回くらいですけど．この前は大阪の阪急百貨店に呼んでもらいました．その前にも仙台と新潟で呼ばれたのかな．仙台とか新潟のときは、ひょっとして人が足りんから呼ばれたのかなという，どこか卑屈な思いが正直あったんですよ．だけど、大阪行ったときに，デパートの中入るとでっかいタペストリーが入口にあって，僕の石獅子がメインでポスターに載っていた．電車の中吊り広告にもメインになってたから，ちょっと感動して鳥肌たちました．

石獅子づくりのワークショップ

本　誌：ワークショップもされていますよね．

若　山：そうですね，ワークショップはお話があればという形で．今日も八重瀬町から，職員の方向けのワークショップの依頼がありました．

本　誌：面白いですね．町の，どんな目的になるんでしょうか？

若　山：八重瀬町は石獅子がとても多いんですね．だからワークショップとしては月 1 回，色々な顔の石獅子を作る，というのをやりたいと話してましたね．

本　誌：本当にいろんな種類があるんですよね．

若　山：だから本物を見に行って作る，みたいな．僕も八重瀬町が石獅子の元祖と思っているので，八重瀬町から声がかかるのは嬉しかったですね．

本　誌：他には，どんなところから声がかかるんですか？

若　山：年一回定期的にやらせてもらってる読谷のショップには，もともと石獅子を卸してるんですね．外にピロティがあって一階が駐車場になってて二階がただの屋根付きのベランダになってて，石を彫るには最強の場所です．正直言って，ワークショップとしては手軽な部類ではないんですよね．初めの頃は石に色塗るとかそんなのでもいいのかなと一瞬思いかけながら，『ちょっと違う、彫ることに重きがある』と．あとは，服装に制限があって，危険もあるので手軽じゃないんだけど．でも年に2～3回は声をかけてもらってますね．いい場所があればばやりますよ，的な．

本　誌：参加されるのはどの年代の方が多いですか？

若　山：一応小学生以上とは言ってますけど，子どもだけの参加はなるべくしていません．彫れないので飽きちゃって．だいたい 30 分持つか持たないかなので．逆に大人は熱中して，一番多いのは 30 ～ 40 代かな．

彫刻のために道具を作る

本　誌：あと大学の方でも非常勤で教えてらっしゃる．石獅子を，ですか？

若　山：石ではありますが石獅子ではないです．石彫に使う道具の作り方とか．

本　誌：大学の授業で道具を作るんですね．すでにあるところからスタートしてるのかと思ってました．若山さんが石獅子を作っていらっしゃると聞いて興味を持たれることはありますか？

若　山：あんまりないですね．教えているのは大学一年生だし，しかも教えているのは彫刻科ではなくてデザイン科と工芸科なので．ただ，美大だから美術的なことも押さえないといけないよ，ということで．

本　誌：基礎なんですか？

若　山：基礎ですね．基礎としての石彫なので，嫌々やる子もいます．あと一年生って圧倒的に体力が

ないので，へとへとになってそれどころじゃない．学生の石彫授業の評価も昔から両極端に分かれるみたいです．一番楽しかったって子と一番辛かったって子と．

～道具づくりの動画を見ながら～

これは自分のノミを作ってるんですけど，学生はもう少し単純なやつを作ります．彫刻科の子だと自分の身体に合わせて作りますね．多分だけど，日本人の非力さを認めた道具なのかなと．日本刀とかよく切れるというじゃないですか．あれも極端に言うと力がないからなんですよ．

本　誌：道具の力に頼った感じ？

若　山：そうですね，ヨーロッパとかですと重いんですよね，物が．その重さを振り上げる力が必要で．あとは一気に叩き割るというような感じなんでしょうけど．日本の道具は重くないんですよ．だから形状で真っすぐあたるようにしています．石工なんて絶滅危惧に近いから，日本中でどのくらいの人がやってるか分かんないし，そもそも手の道具屋さんがほとんどないですね．僕が今使ってるのは愛知県の岡崎市っていう町の，もともと石工の町で有名で，日本中みんなそこのを使います．僕が大学一年のときは4つぐらい町工場残ってましたけど，今は一か所だけだし，もうほんとに 80 ぐらいのおじいさんが一人で．ここはまぁ、継ぐ人がいるので大丈夫かなとは思いますが，潰れたら僕も困ります．

本　誌：さっき，一年生は体力がないという話をしてましたけど，若いし，体力自体はありますよね．

若　山：身体の使い方がまだ分かってないのかな．極端ですけど，何回もやって何回もケガしないとやれるようにはならないんですよ．本当は．

本　誌：やってるうちにうまく力を使えるようになるってことですかね．

若　山：そうですね，さっき非力さを認めてると言いましたけど，やっぱりベースの力は必要で，どうゆう風に力を入れるかというのは教えてできるというより，身体が覚えるしかないんじゃないですかね．最初はやっぱり怖がっちゃうし，だいたいみんな手を打っちゃうんですよ．それでもう，怖くなって．今は時代もそうですし，言わないけど，僕らの頃は「手がパンパンになっても上から当てろ」という風に言われて．それは重さを利用するということなんですよ．手先でコンコンやるだけだと量もとれないということだとは思うんですけど．

本　誌：その感覚をつかむことが，最初にクリアすべきところなんでしょうか．

若　山：僕も結局手伝います．それで一回打っちゃって．力の加減分かってるけど，もう半端ない痛さですよ．手がパンパンになって血がばーっと出て，っていうのはだいたいみんな経験してますね．

石を彫る文化を伝えるということ

本　誌：石獅子の制作，非常勤講師，ワークショップなど，石を通してやっていらっしゃることがいくつかありますが，どんな点で共通していますか？

若　山：琉球石灰岩を使っていること，あとは石を彫るということでは共通していますね．石を彫る技法自体はシーサーであろうがなんでも変わりません．そんなに大げさには言いたくないですが，少なくとも沖縄で，石を彫る文化を多少伝えられる側になってるのかなと．大学ではカリキュラムだから当たり前なんだけど，ワークショップだとこれまで一切関わり合いのなかった人たちの参加が多いですし．そうゆう人たちが石を彫る．石を彫るって，普段自分がやってるくせに，やっぱりすごいことなのかなと．機械化が進んで，ひょっとしたらモノを作るっていう必然性は一回途絶えちゃったのかもしれないけど，自分でやることでこうゆうのがある，と．

本　誌：それがどんな風に作られてるのか触れる機会はないですよね．歴史を伝えるということにもなりますね．

若　山：そうですね．また石の道具自体は単純なんですよ．手で彫る分にはそんなに昔から変わってないんですね，多分．だから一回体験すればやっぱり見る目も変わると思うんです．

本　誌：そうですね，うん．

若　山：石獅子の中には 50 ～ 60 年しか経ってないものもありますし，実は機械も使ってるんですよ．でも手彫りっていうふうに伝わっちゃってるんですね．実際，小さい機械を使うぐらいなら手彫りって言っちゃうんですよ，石の世界の中では．でも全くやったことない人が聞いたら全部手彫りと思いますよね．その辺が難しい．機械を否定しているわけではないんですが．

本　誌：正しく伝わるといいな，ということでしょうか？

若　山：そうですね．

モノづくりを続ける中での考え方の変化

本　誌：石獅子を作り始めてから今に至るまでで，何か物の捉え方に変わりはありましたか？

若　山：最初は，雰囲気がある石を 1 個モノとして彫って，2 度と同じ形がつくれないようなものを、と思ってやってたんだけど、「この形もう一個作れないの？」求めてきてくれた人が出たときに初めて真剣に考えました．オリジナルにこだわる，と思い込んでた時は，考え方がやっぱり美術表現の思考だったと思うんですよね．大学にいた頃は細かいものも作っていたんですよ．彫るのは大変だけど，細かい加工がしやすい類の石を使って．それだと彫刻表現として，作るのにも時間はかかるので，小さいからと言って 3000 円で売ることはとてもじゃないけど出来ない．かといって高額になると誰も手が届かない．そうすると何か特別なものというか，そこの部分だけで優越感に浸っちゃうというか．今は割と，民芸的な思考ができたのかなと．要するに，民芸的なというのは生活に寄り添うところにあって，ずっと作られる必然性があるということだと思うんです．結局，僕が沖縄好きなのは，王様の暮らしに憧れてるわけでもなんでもなくて，おばあの豆腐が美味しいとか，そうゆう次元のところでのモノづくり．民芸的な思想が好きなんですね．だから値段も「安い」と言われると嬉しいです．価値を低くみてほしいということでは全然なくて．

本　誌：そんな風に見えない，身近におけるね，ということでしょうか？

若　山：という風に思われだすと嬉しいですね．すごく安直な言い方かもしれないけど，表現としては彫刻というのをやってるけど，美術と工芸の境界線みたいなところでモノを作ってるのかなと．言い方に語弊があるかもしれませんけど，美術の人として偉ぶりたくないし，だからといって工芸の人みたいに，超絶技巧で近寄れない領域に行こうという気もない．昔はその思考もあったんですよ．まぁ，彫れる技術は必要とは思うけど，技術を見せびらかしたいという気持ちもないかな．逆にこれをシーサーとしてみてくれるから不思議です．自分でも最初はこれがシーサーか何かわかっていなかったのに．

本　誌：それが沖縄にあるからですよね．

若　山：でしょうね．僕も本土から来た人がシーサーだというから，「じゃあシーサーに見えるんだな」と思って．ただ，結局これをお手本にしてるうちは，追いつけないのかなという部分もあるから，それは課題です．

石獅子と一緒にこの先へ

本　誌：若山さんとのお話を伺っていると，伝統を残したいという気持ちが伝わってきますが．

若　山：伝統というほど技の伝統ではないですけどね．どちらかというと風習に近い．

本　誌：そうそう，風習ですね．

若　山：だた，風習だからといってなんでも残すのがいいとは思っていません．この石のシーサーに関しては，見てて単純に面白いなって．村落獅子を探してるときって本当に楽しいんですよ．なかなか見つからないんですけど，だから見つかると，その土地も，場所も，目線が変わるというか，知った気分になります．

本　誌：出来るまでのストーリーも入ってきますからね．これから展開させてみたいことってありますか？挑戦といいますか．

若　山：そうですね．ちょっとずつ大きい仕事もやっていきたいですね．それこそ，村落の集合体から声かけてもらって，村落獅子を作ることが出来たらいいですね．僕の想いだけじゃなくて，村の人の想いをもってコミュニケ―ションとりながら作れたら意味があるのかなと思うし．

本　誌：風化しているものを修復するようなのはどうですか？

若　山：それはね．修復は結構みんなされてるんですけど，適当なんです．でもそれが好きですね．僕は逆にあんな風には出来ない．やっぱりそれは，地元にいる人しかやる権利ないのかなって．

本　誌：僕，行ってやりましょうか？ではなく，あくまでも住んでる方たちが，直してほしいなっていうのがないと動きにくいということなんですね．

若　山：修復しすぎちゃって何かわからなくなってるものもあります．全部モルタルで固めてしまって，コンクリートで目をつくられてるとか．

本　誌：それは何か残念な気がしますけど．

若　山：でもね，僕そんなに悪いと思ってないですよね．合理的というか．ひょっとしてその時代にコンクリートがあれば，コンクリートで作ってるのかもしれないし．要するに身近にあるものでそんなに時間をかけないで，と考えると今だったらセメントに行きつくんです．直したのは 20 ～ 30 年前かもしれないけど．何もしないではなくて，直そう

とした意識がそこにあるから，それは大切にとっとこうということですよね．

本　誌：残した方がいいと思われてるということですもんね．

若　山：ワークショップも出来るようになってきてるんで，廃れかけてる手彫りの石彫，石そのものの必然性を理解してくれる味方を増やしたいというのがありますね．ちょっとずつ，それが出来てきてるのはいい傾向だし，あとはこれだけで飯を食えるようになったら一番いいですね．まだ石獅子だけでは無理です．大学の非常勤講師もやってるし．ただ，歴史があるおかげで説明もしやすいし，それは根拠があるモノづくり．のんびりしてるかもしれないけど，今は沖縄での認知を深めていくというのが一番ですね．あとはこれを連れて旅をしたい．

本　誌：獅子が連れて行ってくれるかもしれないですね．

若　山：一昨年は新潟でしたけど，デパートしか行ってないんですよ．ホテルとの往復だったんだけど，それでもすごく楽しかったですもん．行ったっていう満足感が．あとは地元．自分の中には沖縄ってすごく強いんですけど，やっぱり育ったのは愛知県だから，愛知県で発表したいですね．まだそうゆう声はかかりませんが．

本　誌：お話，とても面白かったです．ストーリーが分かると色々興味が出てきますね．写真をみていても，なんでこんな顔が違うんだろうとか．私もぜひ，ワークショップで彫りたいという気持ちになっています．本日はありがとうございました．

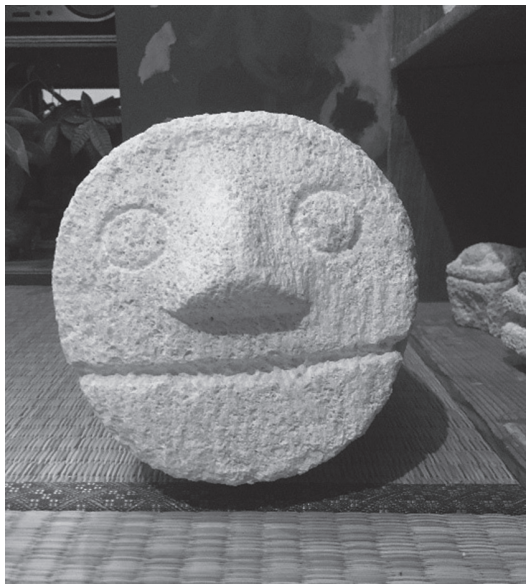

図2）若山さんの石獅子たち

インタビューを終えて

私自身，地元を離れて沖縄で暮らすようになって 10 年を超えた．その間，屋根の上にも門扉の上にも，或いはオブジェとして色々な場所でシーサーを見ているのに，『昔からある魔除け』という認識しかもっていなかったことに気がついた．若山さんのお話の中に，シーサーがなぜ作られて，どんな時代背景によって素材や置かれる場所や数が変わったかというものがあった．造詣が深いのは，シーサーや琉球石灰岩が若山さんの作品づくりのテーマだからというのはあると思うが，そういった沖縄の大衆文化を知ることで，廃れてほしくない風習を今の時代にどのような形で残していくのかと自問すること，また，美術と民芸の間を行き来しながら自身のモノづくりの真のテーマに辿り着いたことは興味深い．お話を伺う中で，制作環境を整える事や生活との折り合いをつけていくこと，認知度を上げることなど，石工を仕事にする故のご苦労も垣間見えたが，それでも沖縄の石を使って身近な人たちの生活に寄り添える作品を生み出すことへの情熱をそれ以上に感じた．子どもの頃から沖縄に魅了され，描いたり作ったりという大好きなことを追い続け、今、ここ沖縄で石獅子作りという作業をされている．そんな若山さんの作業的存在のあり方を，シンプルに素敵なことで羨ましいと思いながら工房を後にした．このつぎに村シーサーにひょっこり出会ったとき，その背後にある村の歴史に思いをめぐらせるだけでなく，若山さんの足跡や石獅子作りへの思いもきっと思い出すに違いない．

（村上典子）